シンポジウム「前庭系の最先端研究－分子生物学からシステムニューロサイエンスまで－」

—司会の言葉—

堀井 新¹⁾・船曳 和雄²⁾

Arata Horii¹⁾, Kazuo Funabiki²⁾

¹⁾ *Suita Municipal Hospital*

²⁾ *Systems Biology, Osaka Bioscience Institute*

第69回日本めまい平衡医学会シンポジウムのテーマとして伊藤壽一会長が上げられたのは「前庭系の最先端研究」である。最近の若手医師の間では「学位よりも専門医」, 「基礎研究よりも臨床指向」といった傾向があると言われている。しかし, しっかりとした基礎研究の土台があって初めて, 正確な病態生理の解明や適確な治療法の開発が可能となる。本シンポジウムでは前庭研究を牽引している世界的にも有名な6人の先生方に前庭研究の最先端をご紹介いただいたが, うち一人は現役耳鼻咽喉科医であり, また三人は耳鼻咽喉科医から基礎研究の世界へ入られた先生方である。

講演内容は, 各シンポジストの先生方の論文に詳しいが, 船曳和雄先生にはマウスの神経細胞を *in vivo* で可視化する技術に関して, 杉内友理子先生にはネコを用いた急速眼球運動発来 of 神経機

構と前庭系のかかわりに関して, 河野憲二先生にはサルを用いた視覚による前庭動眼反射のバックアップ機構の研究に関して, 平野丈夫先生にはミュータントマウスを用いた前庭動眼反射および視運動性眼球運動の可塑性のメカニズムに関して, 和田佳郎先生には国際宇宙ステーション長期滞在中の宇宙飛行士を用いた宇宙実験 (2012年施行予定) および関連する地上実験に関して, 工藤先生には国際宇宙ステーションに長期滞在したマウスの内耳における遺伝子発現を中心に解説いただいた。

シンポジストの先生方には膨大なデータのエッセンスを短い時間でまとめて頂いたが, 多くの若手医師に前庭系の基礎研究の魅力が伝わり, 今後の前庭研究の発展に少しでも寄与できたシンポジウムであれば我々司会の者にとっては望外の喜びである。

¹⁾ 市立吹田市民病院

²⁾ 大阪バイオサイエンス研究所